

北海道建築士

HOKKAIDO KENCHIKUSHI 2015.9.19

目次

第40回全道大会（紋別大会）開催1

A分科会、B分科会.....2

C分科会.....3

青年サミット.....4

編集・発行：（一社）北海道建築士会
情報委員会

URL <http://www.h-ab.com/>

“あったか～い おもてなしで 歓迎！”

第40回北海道建築士会全道大会（紋別大会）が開催

第40回一般社団法人北海道建築士会全道大会が、9月18・19日の両日、紋別市において開催された。大会は294名の参加のもと、テーマ「オホーツクの四季を編む」、サブテーマ「北の建築士、季節の中で熱くなれ」を掲げ、分科会で熱い議論が行われました。

19日、紋別市民会館で開催の記念式典では、大会実行委員長の高野紋別支部長が次のような挨拶を行った。「紅葉が始まり、さわやかな秋の風吹く紋別市で開催できることを大変光栄にまた嬉しく思っている。紋別支部は5市町村から構成されており、現在の会員数は55名の支部。網走ブロック、道東ブロックをはじめ、全道各支部の心温まるご支援とご協力をいただき、今日この日を迎えることが出来ましたことに心からお礼を申し上げます。



大会後の懇親会の料理はできる限り地場産材にこだわっている。大会中は小さな紋別支部であり何かと気になる点も多々あるとは思いますが、同じ仲間として寛大に見ていただければと思います。最後に会員相互の技術力の向上、ネットワークの構築など、実り多い大会となることを期待します。」と挨拶がありました。

続いて、高野会長から、「今年の3月、北海道から景観整備機構の指定を受けることができた。大きな役割を期待されているのが、まちづくり専攻建築士と、ヘリテージマネージャーである。今後は、札幌市をはじめ道内15の景観行政団体それぞれからの指定をめざし、関係する支部との連携を深め、支援体制の強化に取り組んでいく。全道大会は40回目を迎えた。会員が一堂に会し、研修そして交流を行ってきた。今後とも、情報の共有や会員の連帯を深める場として、建築士の品位の保持、技術力の向上に努め、開催地の市民の皆様にも少しでも建築士の息吹を伝えることができるよう運営をしていく所存である。大会テーマ「オホーツクの四季を編む」で示されたように、今大会が、紋別の気候風土そして歴史を背景とした、この地で暮らす人々と建築士が織りなすまちづくりについて、皆様と一緒に考え、各地で模索されているまちづくりの実践の糸口となれば幸いです」と挨拶がありました。多くの来賓の中から高橋北海道知事、宮川紋別市長、三井所建築士会連合会々長からご挨拶をいただき、会長表彰では、19支部28名が受賞され、代表の紋別支部 小田清二様より感謝の言葉がありました。

基調講演では、テーマ「ニセコ斜めの家・始末記 ―豪雪と酷暑とともに―」と題しまして、建築家 倉本龍彦氏によりお話しいたします。

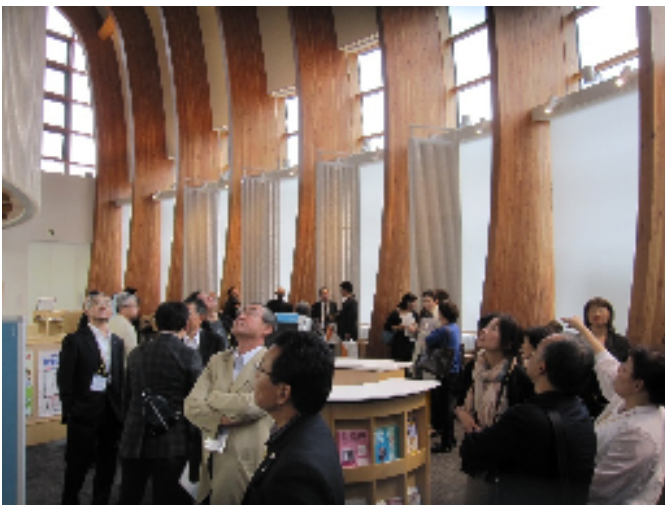
A 分科会 素材のチカラ ～オホーツクの森と暮らしをつなぐ～

2010 年より「暮らしと素材」がテーマの女性委員会。今年は「木」。座学と見学会＝学びと体験という 2 部構成とあって早速会場へ向かう。参加者は男女半々の 63 名。1 部は、紋別市産業部農政林務課森林認証担当石田明久課長が地域素材の活用について講演された。



興味深かったのは紋別地域の森林認証は全国の 38%、全道の 70% で 1 位ということ。その取り組みは公共事業への優先使用、住宅助成事業など、森林組合を中心とした首都圏への取り組み等「森と暮らしをつなぐ」を実践していると思った。今後は北海道を針葉材の普及、下地以外の活用が課題であり、新しい試みも期待される。

2 部は地域材活用の見学先、北見信用金庫紋別支店へ移動。この建物は、地域の木材を使っているだけでなく様々な先進的試みがあるそうで、期待感が高まる。



最初の印象えっ、これが銀行？明るく開放的なやわらかいフォルムは雨の中でも魅力的。設計者である㈱北海道日建設計菅原秀見設計室長の説明によると、特徴

テーマはまちの産業を生かす。まちの交流拠点となること。トライハイブリッド（TRIHYBRID）という木－鉄－コンクリートの 3 種類の材料特性を最大限に活用した新しい架構空間で、地元のカラマツを採用。インテリアには地元のトドマツがあしらわれ、力強さと繊細さが調和した美しい空間であった。

曲線を持つ待合ロビーは街並みへの顔となり、昼夜の表情の変化すること等、地域における企業の姿勢も感じられ、（気持ち良い空間に銀行の新しい形を感じた参加と者も多いのではないだろうか。）

最後に参加者へ直撃インタビューを。

- ・市橋さん（室蘭支部）行政と地場の連携がすばらしい。森林認証課という部署があることを始めて知った。
- ・溝口さん（網走支部）外と内の印象の差が興味深かった。地元の企業への感謝を感じた。

継続テーマ「素材のチカラ」を再考している A 分科会の次の素材は何？と期待しつつ会場を後にした。

B 分科会 波香の四季街（はこうのしきがいの）

郊外型大型店舗の出店による中心市街地の空洞化。多くの地方都市が抱える共通の課題ですが、ここ、紋別市も例外ではなく、かつては、4 万 2 千人を超えていた人口も昨年ついに 2 万 4 千人を割り込んでしまった。市では、このような状況に歯止めをかけようと、平成 25 年 5 月、「紋別市まちづくりビジョン」を策定し、すでに、様々な施策を進めている。

B 分科会のテーマは、時代の波にもまれ、にぎわいを失った街であっても、寄せては返す波のように、形を変えてでも再び活気を取り戻そうとする情景「波香」を探る。まずは、その足掛かりを探るべく、まちあるきに出発。バス 2 台に分かれ、まちなか芸術館を出発した一行は、担当者の説明を受けながら、紋別公園を皮切りに医療福祉拠点、沿道サービス拠点、交通ルートが中心市街地から移った国道（紋別バイパス）、流水が見えるスキー場、観光交流拠点や港湾地区を見て回った。最後 400m 程度、実際にまちを歩く予定だったが、あいにくの雨模様のため、中止となった。

C分科会

まちなかで考える 地域コミュニティと空き家
～建築士としてできること～

近年、人口減少や高齢化の進展により、管理されない空き家が増加しているが、ここ紋別市でも他の地方自治体と同様、少子高齢化等により人口減少傾向にあることから、空き家が増加していくものと思われる。

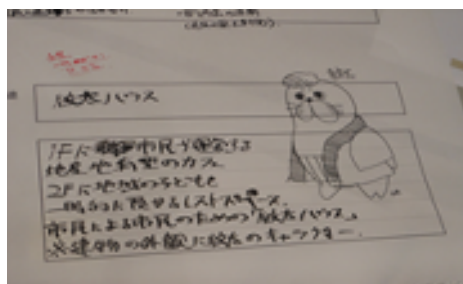
青年委員会主催のC分科会では、この空き家問題に視点を当て空き家の現状や対策を学ぶとともに、建築士として何ができるかをテーマとしてワークショップを行い話し合った。

はじめに紋別市建設部建築課都市計画係長 阿部準士様より空き家問題の現状説明と題し講演いただいた。

全国的に空き家は増えていて、危険家屋や景観上等の諸問題が発生しており、今まで法律がなかったので個別に対応していたところだが、今回空き家法令が整備されてことにより、今後はこの法令により対応していくこと。また紋別市の空き家対策では一定の条件のもと、解体費に最大100万円の補助をする条例を制定していることであった。

次にワークショップでは2部構成とし、第1部では、放置された崩壊寸前の危険な老朽空き家をお題に、現状の問題を学び、その当事者の立場変わって具体的な問題を掘り下げてどのような問題、考えがあるかを抽出し、最後に建築士の立場でどのように関わられるかをグループごとに提案してもらった。

第2部では、紋別市街地中心商店街にある、放置されている空き店舗をモデルに、その地域のコミュニティを活性化させる目的でリノベーションの提案をもらった。



このワークショップをきっかけに、空き家問題に関心を持ち建築士が問題解決に向けての役割を果たしていく時代がすぐそこに来ていると感じた。



「波香」のヒントを肌で感じた一行は、引き続き、紋別市まちづくり推進室の久保田公司 副参事による講演「紋別市まちづくりビジョンについて」を拝聴。これは、第5次紋別市総合計画と整合性を図りつつ、市民意識調査等の結果ならびに平成12年3月に策定した「紋別市中心市街地活性化基本計画」の検証を踏まえて、あらためて、中心市街地の現状と課題を整理し、目指すべき将来像として、「暮らして元気 歩いて楽しい ふれあいの街」を掲げ、その実現に向けた3つの基本方針ならびにそれぞれに即した施策を定めたものだが、映画「アンフェア the answer」などロケ地として使われるなど、新たな観光資源も発掘されているにもかかわらず、それらを効果的に発信する能力を欠いているという行政側の課題も語っていた。参加者からは、『まちづくりは人づくり』というが、紋別市では、どのような取組をされているか？」などと質疑が寄せられていた。



青年サミット

「オホーツクの四季から奏でるまちづくり」
～どの季節の紋別が好きですか？～

夏は心地良い涼風を求めての避暑もよし、冬に北海を覆う流氷の壮大さを体感するもよし、そんな四季折々の自然の魅力が溢れている一方で、人口減や中心市街地のシャッター街化が進み、オホーツク屈指の港町の活気が失われつつある地、ここ紋別に集まった84名の青年建築士。

地域でのまちづくり参加や、これまでの士会活動で培った多くの人々との交流、そこから得た有益な経験や情報を持つ彼らは、まちあるきを通して感じとった活性化のヒント、そして未来へ継ぐまちづくりのキーワードを当地へ伝えることが出来たのか？

サミットは「まちあるき」と「ワークショップ」の2つのステージから構成されていた。

バスで海岸線沿いの市街地を走ると、確かに旧市街地では空き店舗や空き地が散見され人通りも少なく「活気」は感じられない。しかし、その一方で小樽や函館を思わせる坂が多いことや、大型商業施設や公共施設が集約された地区では多くの行き交う人が見られるなど、何かしらのヒントを感じ取ることが出来た。



小高い紋別公園展望台から市内を一望した後、まちあるきをスタート。高台からまちなかへ閑静な住宅街を緩やかに下る山コースと、中心部の飲食店街を抜けて道々沿いの商店街を歩く街コース。どちらの参加者もその様々な目線で、紋別が持っている「住んでいるからこそ気付かない魅力」を探りながら、ゴールであるワークショップ会場まで歩いた。

ワークショップでは、季節毎に紋別の魅力を最大限に活かすまちづくりコンセプトを求めて熱い議論が交わされた。



テーブルからは、「眺めがいいよ！もっともっとアピール出来るよねー」、「もっとガリンコ号を利用しては？」など、まちあるきでの感想を基にそれぞれが思う、魅力ある紋別に必要なものが見える化した「魅力アップマップ」を完成させた。

そこには、坂を利用した「桜並木」や「大願成就する坂、キャリア Hill!」などの命名、水産学校を建て漁師を増やす、水陸両用のガリンコ号をつくろう！までが描かれていた。

「仕事と関係ないことを笑ってバカ言って語り合うのが青年サミットだ。こうやって「何か一つ足りないもの」を見つけていくんだ」という長谷川常務理事からの締め言葉通り、まず語り始めることが大切だろう。そして、そこから生まれた小さな種を大事に育てていきたい。

「紋別の秋って何も無くて困ったんですけど、それを逆手にとって四季の紋別を考えてもらうことにしたんです」と語っていた紋別支部青年部のみなさん、全道の青年建築士が蒔いた「まちづくりの種」はいかがだったのでしょうか？上手く育ちますように。

編集後記：号外2回目の発行でした。いかがだったでしょうか？来年は室蘭です。皆さんで盛り上げましょう！！

編集発行／北海道建築士会情報委員会

神田光英・斎藤勝哉・早川陽子・森 勝利
高松 徹・熊谷 智・柳山美保子・鈴木雅人